

令和5年度 能美市立和気小学校 学校経営具現化に向けた学校評価表(前期)

項目	具体的方策	主担当	【評価指標】 (成果指標) (努力指標) (満足度指標)	【評価の根拠】 達成度判断基準	評価	前期評価からの 分析と考察	今後の改善策	学校運営 協議会 による意見	後期評価	成果と課題
1	【ロードマップの活用】 学校力向上ロードマップを活用し、組織的・計画的に運用する。	竹田	【努力指標】	【教師アンケート】 自分の担当分掌について、毎月ロードマップを検証し、適切な取組となるよう見直しを行った」と肯定的に回答する教師の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【教師】 85.7% A	・昨年度100%から85.7%となり、B評価やC評価の「どちらかというときできなかった」と答える教職員の割合が多かった。新任の教職員が多く、担当分掌を見直しをもって行うことが難しかったと考えられる。 ・コロナ以前の取組も復活し、取組ごとの見直し・検討にも時間を要したことも計画的な運用につなげられなかった取組もあった。	・ロードマップを確認し、夏休みでの三部会・主任会議を組織的・計画的に進め、2学期の取組を充実したものとする。10月に中間チェックする。 ・各主任を中心に各部の取組をやり切るために、教務から各主任への声かけはもちろん、各部間の連携をコーディネートしていく。各担当が取り組み後にすぐにふり返りを行い、来年度に向けて提案文書の訂正をしておく。	残業時間の削減が結果に表れているのはよい。		
			【業務改善】 多忙化改善に向けた取組や意識改革を推進すると共に協力・協働による有効な(効率的な)業務遂行を図る。	【努力指標】 業務の平準化やワークライフバランス意識の向上に努めると共に協力・協働による効率的な業務遂行を図る。	【教師アンケート】 「学校運営において、業務の平準化やワークライフバランスを意識し、業務改善に努めた」と回答する教師の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	【教師】 100% A	・職員朝礼の廃止、職員終礼は週1回としたことで、参集する時間を削減することができた。教員チャットルームによる、日常的で迅速な情報共有に努めているが活用の意識には職員間で差が見られる。 ・SSSの積極的活用により事務的作業の軽減が図られている。教員個々の業務改善ワークライフバランスに対する意識は高く、見通しを持った効率的な業務遂行が図られている。 ・業務の平準化に対する意識も高いが、学校規模に関わらず存在する業務数を少ない職員数で均すことには限界があり、改善には難しさがある。			
2	【授業力の向上】 児童が「わかる」「できる」授業をつくる。	永吉	【努力指標】 児童が「わかる」「できる」授業をつくることのできている。	【教師】「児童が適用題を解けるよう指導を工夫している。」と肯定的に回答する教師の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 【児童】「本時のたしかめ問題を自分の力で解くことができた。」と肯定的に回答する児童の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【教師】 100% A 【児童】 91.7% A	適用題までを視野に入れた授業構想を立てることで、必然的に本時のゴールを意識した授業となり、指導の工夫につながった。 適用題を視野に入れた授業のため、自分の力で適用題が解ける児童が多かった。	前期の取り組みを継続し、適用題までを含めた授業づくりを実践していく。 適用題の丸つけは、①教師が行なう、②終わった児童がミニ先生になって行う、③端末を活用する等の方法を試しながら、より短時間で的確に見取りができる方法を模索していく。	児童の学習支援等、CSとして、平日に手伝えることがあれば声をかけてもらえる。自分の判断で、よりよく豊かな生活のためにICTを使える子供を育ててほしい。		
	【GIGAスクールの推進】 ICTを効果的に活用した授業構想を立て、実践を進める。		【努力指標】 ICTをねらい達成に向けて活用した授業構想を立て、実践を進めるように努めている。	【教師】「ねらい達成に向けてICTを使った授業を行っている」と肯定的に回答する教師の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【教師】 84.6% A	クロームブックを1日0回使うという目標から「ねらいを達成するためのICT活用」という目標に変えたことで、教師の意識は「とにかく使う」から「ねらい達成」にうまく変えることができた。 ねらい達成のための活用頻度が更に高まるとよい。	小松教育事務所の『GIGA NAVI』や能美市の『withクロムスタイル帳』の実践例を参考にし、ねらい達成のためのICT活用を進める。 ICTサポーターによる端末活用の研修会を行い、個別最適化・協働的な学びに繋がれそうな活用方法を検討していく。			
	【学力の向上①】 AIドリルや帯タイムを活用して基礎学力の定着、習熟を図る。		【成果指標】 単元末テストの平均(知識及び技能)で(低学年)85点以上(高学年)80点以上達成した児童の割合が8割以上を目指す。	【各種教育データ】 単元末テスト(知識及び技能)で低学年85点、高学年80点以上達成した児童の割合が、 A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【国語】 60.4% C 【算数】 74.7% B	・低学年で達成した児童の割合は国語56.2%、算数66%、高学年は国語63.2%、算数80.5%であった。 ・国語は、2年以上のすべての学年で達成率が70%未満であった。漢字の書き取りやことばの使い方、意味理解につまずきがあると考えられる。 ・算数は、今年度より全校共通のワークで定着・習熟の徹底と見取りを行ったが、高学年を中心に少しではあるが伸びが見られた。	・学力向上プランに基づいた指導の徹底を行い、個別支援を要する児童への支援体制を整える。(支援員の配置、帯タイムでの級外支援、支援会議や通級との連携などによる組織的支援) ・漢字の書き取りや言葉の学習については、ドリルパークとナビマ(AIドリル)を使い分けて字形をしっかりとらえたり、ことばの使い方や意味理解を復習したりし、定着を図る。同時に教師はタイムリーに習熟度を把握し、指導改善・個別支援に努める。			
【学力の向上②】 読書活動を充実させ、読書の質の向上を図る。	【成果指標】 各学年のおすすめ10冊を1年間で読むことができる。	【各種教育データ】 「おすすめ10冊」のチェックカードを前期、後期に集め、検証する。(達成率) 前期…5冊以上 後期…10冊以上達成した児童の割合が、それぞれ A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	1年28人 2年0人 3年0人 4年30人 5年6人 6年14人 41.6% D	・5冊達成できた児童の割合が学年によってばらつきがでた。休み時間に利用できる枠が増えたことと、朝読書でおすすめの本を読むと決めたことで、昨年同時期より5冊達成者の割合が増えた。(昨年度32%)	・教職員への取組の周知を図り、「おすすめの本」の利用の進捗状況を伝え、声かけをする。 ・おすすめの本10冊達成者を集会で名前を呼び表彰することで、達成できるよう意欲をもたせる。集会では必ずおすすめの本や読書の良さを伝えていく。(2学期2回、3学期2回) ・季節のイベントにおすすめの本を絡めたりする。					

3	豊かな心の育成	【児童会活動の充実】 児童主体の児童会活動を通して、主体的実践的な態度を育成する。	【成果指標】 児童が児童会活動に積極的に参加し、児童会目標を達成しようとしている。（児童会活動とは、各行事、委員会の取組、たてわり活動など）	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】 「児童が主体的に取り組めるように働きかけた。」と肯定的に回答する教師の割合が、 A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満 【児童アンケート】1～4年「児童会活動の取組に前向きにさんかできた。」5・6年「学校をよりよくするために進んで児童会活動に取り組むことができた。」との肯定的な回答する児童の割合が、 A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	【教師】 100% A 【児童】 90.5% A	・児童アンケートの結果、学校全体では90.5%とA評価7であったが内訳をみると、5、6年生が88.7%、1～4年生が92.4%と実質活動している高学年の肯定的な回答をしている児童の割合が予想より少ないと感じた。委員会活動の内容としたら昨年度と比べても充実しているように感じるので、アンケートを実施する際に、児童が活動を振り返ったり実績を感じてアンケートに答えられるような手立てが必要である。	・前期委員会の任期は9月末の運動会後までとなる。運動会を通して、各委員会活動の活動内容も児童主体の充実したものにするために、各担当の工夫や声掛けが必要である。 ・行事や各委員会の季節に応じた取組を通して、1～4年生にも行事や委員会の仕事内容を知れる機会を設ける。各委員会の取組に個人的に、またはクラスとして参加できる機会を設けて、頑張れたことを感じられる取組とする。そうすることで、全校児童（高学年も含めて）の自己肯定感の向上や達成感・成就感につながると思う。	いじめや不登校傾向児童対応アイデアの一つとして、ロールプレイを見て自分たちで考え、議論させている取組をメディアで見たことがある。		
		【道徳授業の工夫】 道徳の指導法を工夫し、考えを聴き合い伝え合う授業づくりを行い、道徳的実践意欲を高める。	【満足度指数】 児童が道徳の授業で学んだことを生活に結び付けたり生かしたりしようとしている。	【教師アンケート】 「授業の終末に自分ごととしてとらえさせる時間をとることができた」とする教師の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 【児童アンケート】「道徳の授業の中で自分ごととして考えることができた」と肯定的な回答する児童の割合が A：80%以上 B：70%以上	【教師】 100% A 【児童】 91.0% A	・アンケートの結果から教師は授業で生活に結び付けることができるように指導するように心がけており、またほとんどの児童も毎回の道徳の授業が自分のこととしてとらえて考えていることがうかがえる。終末の振り返り際、教師側で自分のこととしてとらえる視点を与えたり、資料が自分事として捉えにくいものでも授業の展開の中でより考えさせることのできる工夫がされていると思われる。	・夏休み中に研修会を開き、より児童が多角的・多面的に考えることができるようにICTを効果的に使った道徳の授業を紹介し、2学期の授業につなげたい。 ・今後も引き続き自分事として捉えられるように、4月の提案を再確認し、道徳的実践意欲の高まりにつなげる。			
		【校内支援体制の充実】 不登校等の未然防止のための校内支援体制や教育相談、児童理解の会を充実させ、専門組織との連携に努める。	【努力指標】 情報交換を密にし、担任や各主任が連携・協働し、諸課題の早期解決・未然防止に努める。	【教師アンケート】 「情報交換を密にするため、校内支援会議を学期に2回設け、諸課題の早期解決・未然防止に努めている」と肯定的に回答した教師が、 A：90% B：80% C：70% D：70%以下	【教師】 100% A	・校内支援会議を1学期に2回（夏季休業中に1回を含む）実施し、児童の困り感を把握したり、担任だけが抱え込むのではなく、チーム学校として対応できるような支援体制を固めた。 ・職員会議の後に、「児童理解の会」を設けて児童の様子や支援の必要性等の共通理解を図った。 ・学期はじめ（スタートからの3日間）に担任が気付いた児童の様子を一覧にまとめ、情報を共有した。 ・GW前に長欠児童を中心に児童の様子に注視することを職員に促した。 ・上記の4つの取組から校内支援体制を充実させてきた。	・不登校児童、不登校になりうるような可能性がある児童に対して、情報の共有と手立てを考察できる機会を柔軟に設けていきたい。 ・教育相談担当が中心になってSCとの連携を図り、児童の様子を把握したり児童に合ったアプローチの仕方を検討し、児童理解につなげたり支援体制を固めたりする。夏季休業中にSCを講師としてお招きし、不登校等への対応について知識を深める機会を設ける。 ・学習の理解度と不登校との関係性について、職員の理解を深める。授業において「生徒指導の4つの視点」を意識して授業を行い、児童の学習における困り感などを減らしたい。	ほめてもらえる機会を増やすとよい、		
4	健やかな身体の育成	【体力向上の工夫】 体力アップ1校1プランの取組等を推進し、体力の向上を図る。	【成果指標】 3年以上の4クラスで「上体起こし」と「長座体前屈」の記録を6月に計測し、それよりも12月には、「上体起こし」で2回以上、「長座体前屈」で3cm以上記録をのぼす。	【各種教育データ】 【体力テスト①②の結果】 3年以上の4クラスで「上体起こし」と「長座体前屈」の記録を6月に計測し、それよりも12月には、「上体起こし」で2回以上、「長座体前屈」で3cm以上記録をのぼすことができたのは3学年中、 A：4学年が達成 B：3学年が達成 C：2学年が達成 D：1学年が達成	実践中	【上体起こし（6月結果）】3男16.5 3女12.5 4男16.4 4女16.2 5男21.1 5女17.3 6男21.1 6女18.0 【長座体前屈（6月結果）】3男33.1 3女34.5 4男31.0 4女32.3 5男33.7 5女33.9 6男44.6 6女42.3	・2学期の体育の中で、上体起こし・長座体前屈の記録の伸びにつながる柔軟体操、ペアでの体力作りの取り組みを行う。 ・夏休み中に職員で有効な柔軟体操やペアでの体力づくりについての研修を行う。 ・2月の学校体育担当者会議での発表に向けて研修の様子や2学期の子供たちの様子をビデオに撮っておく。	思ったように体が動かせることで、運動量も増え、体力も上がってくると考える。体育の授業で、動きのペースとなる運動を継続して行うことではないか。		
		【生活習慣の確立】 「早寝早起き」の習慣化やメディア利用の約束を行い、基本的な生活習慣を確立することで、心身の健康の保持増進を図る。	【成果指標】 メディア利用の約束を守り、早寝早起きと睡眠の大切さを理解している。	【生活アンケート・保護者アンケート】 【生活アンケート】 「メディア利用の約束を守り、早寝早起きができている」と回答している児童の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 【保護者アンケート】 8時間以上の睡眠時間（低：9時間、高：8時間）を週に4日以上とすることを心がけていると回答する保護者の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	【児童】 B 71.7% 【保護者】 B 89.9%	早起き（6時半まで）ができている児童は67%、早寝（1・2年9時、3・4年9時半、5・6年10時まで）ができている児童は72%であった。メディア利用の約束は、決まっている家庭が73%、そのうち守れている児童は76%であった。しかし、メディア利用の約束が決まっていない児童や、決まってい守れていると答えた児童の中にも、メディア利用時間が長い児童が多く、家庭によってルールの内容にも差があると考えられる。育友会生活委員会が保護者に話を聞いた際は、「家庭ではゆっくりさせてあげたい気持ちがあり、就寝時刻が遅くなる」「メディア利用については制限をしていない」との声もあった。	・夏休み中は生活リズムが乱れていることが考えられるため、登校日から「生活リズム見直しシート」の取組を行い、2学期をスムーズにスタートさせられるようにする。 ・学校保健委員会前に、児童・保護者に生活アンケートを行い、それぞれの生活習慣に対する考え方や、困り感などを把握する。 ・11月の学校保健委員会で「睡眠」をテーマに取り上げ、メディア利用と睡眠の相互関係について児童・保護者に啓発する。 ・学校保健委員会後に、生活習慣チェックを行い、家庭で生活習慣改善に向けて取り組む。			
5	家庭・地域との連携	【ふるさと教育の推進】 ふるさとのことを知り、ふるさと愛を育む、ふるさと教育を推進する。	【努力指標】 地域教材等地域の特色を生かしたふるさと教育の推進に努める。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】 「地域教材等地域の特色を生かした教育活動を行った」と回答する教師の割合が A：100%以上 B：90%以上 C：80%以上 D：80%未満 【児童アンケート】「生活科・総合や地域の方との学習を通してふるさとが好きだ」と回答する児童の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	【教師】 100% A 【児童】 91.7% A	・各学年において、地域の自然、人材、特産物、施設等を生かした生活科、総合的な学習の時間が展開されている。また、前期は高学年において、地域の方々に講師として、虚空蔵太鼓等の地域の文化・自然に親しむ「ふれあい活動」を実施した。自然観察クラブ、防災クラブ等においても地域人材を講師に、地域の自然や生き物に親しむ活動が充実できている。見守り隊は全家庭の所属により、通学時の和気町交差点の見守り当番が実現している。	・活動内容の見直しや新たな講師の人材発掘など、今後も持続可能な活動になるよう準備を進めていく必要がある。 ・夏休み中に校区バスツアーを実施し、校区にある学びのリソースを研修することで職員の校区への理解を高める。 ・今後も関わってくださった方々に子供たちの学びの実感や感謝の気持ちを丁寧にフィードバックしていく。	見守り隊をしていて、小学校を卒業しても毎朝挨拶をしてくれる。集団登校の姿から、高学年にリーダーとしての責任感が育ってきていることが伝わってくる。		
		【あいさつができる子の育成】 気持ちよい挨拶ができる子を育てる。	【努力指標】 児童が相手意識を持って挨拶をしようとしている。	【児童アンケート・保護者アンケート】 【児童アンケート】 「学校で「おはようございます、こんにちは、さようならなど」のあいさつを自分からすることができる。」と肯定的に回答する児童の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 【保護者アンケート】 「子どもは地域や家庭であいさつをしている。」と肯定的に回答する保護者の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【児童】 93.7% A 【保護者】 93.5% A	・児童、保護者アンケートの結果からどちらもA評価となった。特に、1～4年生の結果が昨年度より6ポイント上昇し、94.9%であった。運営委員会の挨拶運動で取り組んでいる様子を文字や写真にして掲示することで実感できたのではないかと考える。また、挨拶ビンゴや表彰するなど挨拶に関心が高まるような取組も功を奏したのではないかと考える。	・挨拶をしっかりとできる体制は整ってきたように思うが、「自分から」という自発的な行動にはまだ消極的なように感じる。 ・挨拶をされて相手はどんな気持ちになるのか、友達や先生、地域の方たちにインタビューをして挨拶をされたときの気持ちを知れる機会を設けて、児童の自発的な挨拶が身に付くようにしたい。			

